

## 産業観光と地域づくり ～そらち“炭鉱の記憶”地域づくり の活動から見えてくるもの～



角 幸博 (かど ゆきひろ)  
北海道大学名誉教授

1947年北海道札幌市生まれ。70年北海道大学工学部建築工学科卒業。同年工学部助手、97年同大学院工学研究科助教授、2002年同教授を経て、11年退職。北海道大学名誉教授。現在、日本建築学会北海道支部長、札幌市文化財保護審議会会長、札幌市都市景観アドバイザー、そらち『炭鉱（やま）の記憶』で地域づくり推進会議会長、北海道文化財保護協会副会長。

泊居神社跡から望む旧王子製紙泊居工場。神社遺跡の保存は検討されているが、工場遺構は対象となっていない

### はじめに

空知支庁（現空知振興局）では、1998年から炭鉱遺産に関連する事業を継続して展開してきた。そらち・炭鉱（やま）の記憶発掘事業（1998～99年）、そらち・炭鉱の記憶推進事業（1999～2001年）、そらち・炭鉱のまちからの挑戦事業（2001～03年）、空知産業遺産活用自立化促進事業（2004～06年）、元気そらち！産炭地域活性化促進事業（2007～09年）、そらち「炭鉱（やま）の記憶」で地域づくり（2010～11年）などである。

最初から関わってきたので、14年にもなることに我ながら驚くが、よく考えると、地域づくりが熟成するまでには、それほどの年数が必要なのだともいえる。

話はそれるが、筆者は南サハリンの樺太期の歴史的建造物や遺跡の調査を始めて、やはり15年目を迎える。初めてサハリンの主要3都市（ユジノサハリンスク、コルサコフ、ホルムスク）の現況調査を始めたのが1996年のことである。現況調査や時に実測調査を実施し、実測図作成後はそれらを建物管理者やサハリン州政府に寄贈してきたが、4年前から、これら樺太期の史跡や歴史的建造物を観光資源として評価しようとする動きが、サハリン州文化省主導で見られるようになった。筆者らの研究結果を踏まえながら、日ロ両国の南サハリンにおける歴史を直視し、史跡や歴史的建造物を評価しつつ、観光資源として保存活用するという姿勢である。筆者も専門家として、シンポジウムの参加や企画、建造物の保存活用方針などに、微力ながらお手伝いしている。

しかしながら、そのような姿勢の中でも、旧王子製紙関連工場などの産業遺構の意義や評価などを力説しても、まだまだ理解が示されない状況である。



同じような体験を、空知の「炭鉱の記憶」発掘事業の開始時にも味わった。いまさら炭鉱遺産をほじくって何になるんだ。よそ者に、かつての炭鉱の光や陰なんて理解できないだろうし、理解してもらおうとも思わない。筆者自身、空知とは何の縁もなく、子供の頃には日常生活で石炭のお世話になり、石炭のない生活なんて考えられなかった時代を生きてきたという体験でしかない。が、昼夜問わず、ゆっくりと時間をかけてお互いの考えを明かすことで、少しずつ事業の大切さを理解してもらうことができたように思う。これまた、地域の方々とのコミュニケーションには、時間が急がないことという当たり前のことを学んだ。

### 産業遺産とは

産業遺産 (Industrial Heritage) は、近代化遺産、近代遺産、近代産業遺産など、様々な呼び方をされるが、現在は、TICCIH (国際産業遺産保存委員会) のニジニータギル憲章 (2003年) における産業遺産の国際的基準によることが一般的である。そこでは産業遺産の定義を、「歴史的、技術的、社会的、建築学的、あるいは科学的価値のある産業文化の遺物からなる。これらの遺物は、建物、機械、工房、工場及び製造所、炭坑及び処理精製場、倉庫や貯蔵庫、エネルギーを製造し、伝達し、消費する場所、輸送とその全てのインフラ、そして住宅、宗教礼拝、教育など産業に関わる社会活動のために使用される場所からなる」とし、年代については「18世紀後半の産業革命の発祥時期から現代にまで及び、又産業化以前及び産業化初期の起源も研究する」と記述している。この定義で言えば、北海道では和人が入地、定住し始めた頃からの、漁業、農業、酪農、鉱工業全てが産業遺産の対象ということができ、炭鉱遺産はまさしく定義どおりのものである。

### 空知と炭鉱遺産

「はじめに」で触れたように、これまで空知で展開されてきた事業は、炭鉱遺産の魅力や可能性を着実に

定着していったプロセスであった。

「炭鉱 (やま) の記憶発掘事業」では、1) 石炭生産過程に関連する施設や関連工具・機械、2) 商店街や歴史的建造物などのまちなみ・風景、3) 炭鉱での働く様子・暮らし・文化などの記録・情報を「そらち・炭鉱 (やま) の記憶」と定義し、それらの現況・歴史・掘り起こしなどの現地実態調査を、歌志内、夕張、三笠、美唄、岩見沢、赤平、芦別、滝川8市と上砂川、栗沢、栗山、月形、沼田5町で実施した。さらに写真やアルバム、記念誌、エッセイなどの一般公募を加えて、198件のデータベースが完成し、ホームページ上でも公開された。

「そらち・炭鉱の記憶推進事業」では、「そらち・炭鉱の記憶」の普及・啓発、「そらち・炭鉱の記憶」を活用した地域づくりのあり方などについて検討し、コミュニティー・ミュージアム構想が提示された。

そらち・炭鉱の記憶コミュニティー・ミュージアム構想とは、「そらち・炭鉱の記憶」を空知地域の新しい地域資源として位置づけ、これらを活用地域住民自らが主体的に取り組む地域づくり構想である。博物館施設という「箱もの」建設ではなく、地域の歴史遺産や愛着の深い「宝」を活かして、地域コミュニティーが抱える様々な課題を解決し、今後の地域づくりに活かしていこうという取り組みで、炭鉱の歴史を伝える「屋根のない博物館」として情報発信を目指したものであった。

「そらち・炭鉱のまちからの挑戦事業」では、コミュニティー・ミュージアム構想の実現に向け、また炭鉱の歴史や特色ある文化などを活用した地域づくりを、地域住民が主体となって推進するため、専門家と地域づくりリーダーとで検討委員会を構成し、地域づくり団体の組織整備、ファンクラブの設立などが行われた。こうした動きの大きな励みとなったのが、北海道遺産の認定証授与であり、「そらち・炭鉱の記憶」の価値の再認識と地域住民及び事業推進のエネルギーとなってくれた。

「空知産業遺産活用自立化促進事業」では、これまでの地域づくりを、住民が主体となった自立的・持続可能な活動とするために、地域資源を活用したまちづくりに関する行政施策の展開方法、観光への活用などを検討し、自治体の振興計画における産業遺産の位置づけと取り組み、産業遺産の観光資源としての評価と活用方策、人材育成に向けた手法の構築（例えば、赤平のガイドボランティアTantanの発足やみかさ・炭鉱の記憶再生塾のガイド育成など）、炭鉱遺産の保存・管理の手法の検討などが行われた。

「元気そらち！産炭地域活性化促進事業」では、空知産炭地域の民間主導による自立化を促進するために、2カ年で、炭鉱遺産の多角的な活用方策の検討を行う炭鉱遺産等活用調査会議と炭鉱遺産などの地域資源を生かした広域景観づくりを検討する広域景観調査会議を設置し、活性化戦略の基本的構造を、まち力（市民力）、地域の固有性の先鋭化をめざす創造都市、この二つおよび地域内外を連携・調整する地域マネジメントの3要素で構成することを提案している。そこでは、地域外の力を地域内に引き入れるためのネットワーク化として、質×量の最大化をめざし、呼びかけのターゲットを「炭鉱遺産に反応する価値観を持った人」と固有化している点が特徴である。そのために、歴史、アート、産業的自然、ジオパーク、回廊の五つのトレイル（ルート）を構想し、かつ三笠と赤平を対象に、拠点形成のスタディーを検証するなど、具体化の手順まで踏み込んでいる。

「そらち『炭鉱（やま）の記憶』で地域づくり」では、2009年3月に策定された「元気そらち！産炭地活性化戦略」を具体的に推進していく、推進会議を設置し、学識経験者、管内の13市町長や炭鉱の記憶関連活動団体などが委員として参加し、炭鉱の記憶を手がかりに、外からの刺激や支援によって地域内の活力が生まれる環境づくりや活性化戦略で設定した14拠点の魅力づくりやネットワーク化のほか、訪問者や地域住民に『炭鉱の記憶』の魅力を経験的に伝えるガイド育成を目的

とした「そらち『炭鉱（やま）の記憶』ガイドマニュアル」を作成している。さらに、民間委託の「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」が岩見沢市の駅前に2009年8月17日開設した。同センターは、炭鉱遺産を活用した地域活性化の活動拠点として、地域内外の交流拡大、地域活動の活性化、人材育成などをめざしたもので、これまでの長年の事業の集大成として画期的なことであり、今後の自立化の拠点として機能することが期待されている。

### 鉱山ヒストリー会議と炭鉱遺産の価値評価

話は前後するが、2003年9月26～29日、赤平市で第6回国際鉱山ヒストリー会議が開催された。アジアで初、もちろん日本初の会場として赤平市が選ばれた背景には、加藤康子（都市経済評論家）氏らの推薦のほか、空知地域全体の炭鉱遺産に対する強い思いと2002年3月に「空知地域に残る炭鉱関連施設群」が北海道遺産に認定されたことが大きな引き金となっている。この国際会議には、日本を含め14カ国、147名の参加があり、国内から102名が参加した。筆者もフォーラムへの参加と「北海道空知産炭地域における炭鉱遺産と価値評価について」と題する学術発表を行ったが、市民挙げての国際学会への応援には、多くの学会を経験している筆者にとっても新鮮な感動であった。

空知地域の炭鉱遺産（「炭鉱の記憶」）は、石炭産業の生産システム、つまり生産施設や関連機械、鉄道などと、倶楽部や炭鉱住宅、福利厚生施設などの生活関連施設など、暮らしやまち並み、文化を含む社会システムの両方が、断片的ながらそろっていることに大きな意味がある。企業毎に、生産過程や福利厚生原理は微妙に異なるものの、地域に点在する諸施設遺構を結びつけ、関連づけることで、産炭地のシステム全体を理解することができるのも、この地域の強みである。

ヒストリー会議では、炭鉱遺産の項目として、A.産業史的価値、B.生活文化的価値、C.歴史的価値、D.美的価値、E.景観的価値、F.活用価値のほか、地域住民

の愛着度や地域づくりの取り組み等も含めたG. 思い入れ価値の7項目の評価指標について提案した。

A. **産業史的価値**は、坑口、発電所、立坑櫓、原炭ポケットなど、採炭・選炭システムを示す施設を対象として、a1. 産業・技術史を語る上で大切、a2. 採炭システムの一端を象徴する、a3. 群として産業システムを表すなどの評価がなされるものである。a3. の具体例としては、美唄市炭鉱メモリアル公園内の三菱美唄炭鉱立坑巻揚櫓（1923年）、同開閉所（1925年）、同原炭ポケット（1925年）の施設群や三笠市の住友奔別炭鉱立坑櫓（1906年）を中心とする原炭ポケット、選炭・精炭施設群などがあげられる。



炭鉱メモリアル公園の旧三菱美唄立坑櫓

B. **生活文化的価値**は、炭鉱住宅、倶楽部、浴場、小学校、映画館などの福利厚生施設や駅舎などの流通施設など、社会システムに関わる価値で、b1. 炭鉱生活やコミュニティを語るもの、b2. 北炭鹿ノ谷倶楽部（1920年、夕張市）や三井美唄娯楽館（1955年、美唄市）など、炭鉱の繁栄・文化を語るものなどである。



炭鉱の繁栄を今に伝える旧北炭鹿ノ谷倶楽部（現夕張鹿鳴館）

C. **歴史的価値**は、c1. 築後50年を経ている、c2. 特別の由来や由緒がある、c3. 地域の歴史をたどる上で大切または希少、c4. 施設種別の典型例の4項目をあげた。いずれも国の登録有形文化財の評価項目を援用したものであるが、c1. の年数は、地域によっては4半世紀にあたる25年という切り口も考えられる。c2. は、北炭社員の信者によって献堂された日本聖公会夕張教会堂（1926年、夕張市）や、炭鉱労働者の安全祈願、心の支えとして、炭鉱技師が建立した万字炭山神社（1906年建立、1917年遷座）などがあげられる。またc3. は同一の用途や性格の遺産であっても、地域によって価値評価が異なる場合もある。c4. は、三井炭山炭鉱事務所の典型例ともいえる三井美唄炭鉱事務所（1933年）や標準設計で建設された駅舎の一つと考えられる三井芦別駅舎（1940年）などが事例としてあげられる。

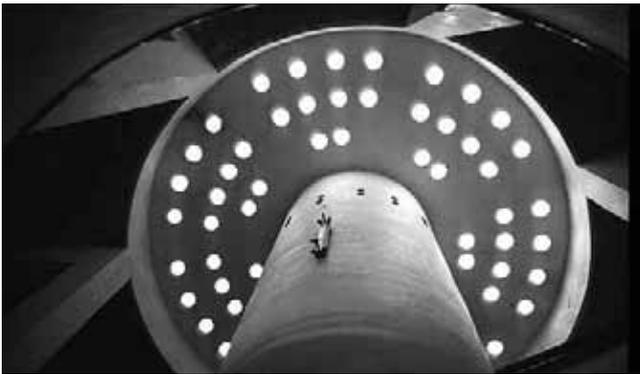


炭鉱技師が建立した万字炭山神社



三井炭山炭鉱事務所の典型例といえる三井美唄炭鉱事務所

D. 美的価値は、d1. 外観、内部意匠・デザインが優れている、特徴的な材料で造られている、d2. 構造物としての迫力や構造美を有するなどの項目である。絵やスケッチ、写真に収めたくなる魅力など、主観的、心情的判断基準も加味しうる評価である。d1. の例として、レンガの壁面と白モルタルで縁取られたアーチ窓が魅力の北炭滝之上水力発電所（1924年、夕張市）、廃虚となっているが内部中央のらせん階段やトップライトのデザインが秀逸な沼東小学校（1959年、美唄市）、d2. の例として、現存する原炭ポケットの道内最大規模で、鉄筋コンクリート造の柱梁の格子構成が迫力ある三井美唄炭鉱原炭ポケット（1925年）や、住友奔別炭鉱立坑櫓（1960年）の造形や東洋一の立坑と称された住友赤平炭鉱立坑櫓（1960年）の迫力ある内部空間などがあげられる。



秀逸なデザインで構成された円形校舎の旧沼東小学校トップライト



住友赤平炭鉱立坑櫓記念時計（赤平市炭鉱歴史資料館所蔵）



今にも動き出しそうな迫力ある住友赤平炭鉱立坑櫓内部

E. 景観的価値は、e1. 特色ある景観を構成しているや、e2. 景観のランドマークとして評価される。三笠市弥生地区の住友社宅群（1967～69年）や三笠市幌内炭鉱跡地などは、特色ある景観を構成している。



三笠市弥生地区の住友社宅群

F. 活用価値は、地域づくりやまちづくりにどのように活かしていくか、さらには、生涯教育、観光、アートやランドスケープとのコラボレーションなど、今後の活動方針や地域計画とも密接に関わっているものである。ドイツ・ルール地域のIBA（Internationale Bau Ausstellung Emscher Park）エムシャー構想で展開された歴史的工業遺産の保存活用などが著名な事例だが、空知地域の旧北炭清水沢火力発電所（1926年）を

メイン会場とした夕張市水沢アートプロジェクト（2011年9月17日～10月16日）や旧北炭幌内炭鉱布引立坑跡で開催の幌内布引アートプロジェクト（2009年10月3日～11月3日）なども好例であろう。



旧北炭清水沢火力発電所を会場としたアートプロジェクト

G. **思い入れ価値**とは、市民力とか地域力とも言い換えることができるかもしれない。どれほど価値があるものでも、地域住民の愛着や思いが薄ければ、次世代に受け継がれていかない。もちろん、最初からその思いが強い場合もあるが、多くは身近であればあるほど当たり前のもので、古くさい遺物としか思っていない。なくなって初めて、ぽっかりと胸に穴が開き、その価値に気づく。地域史や生活の歩み、自己体験を通して、また地域づくりへの取り組みの過程の中でその意味に気づかされていくことも多い。つまりは、住民自身が遺産を地域の「宝」や「財産」として位置づけ、さらにはこの「財産」の活かし方を通して、次世代への贈り物として積極的に関わるエネルギーとなるものであると考ええる。

これらのいずれかの評価が、客観的に共有できるのならば、炭鉱（やま）の記憶は、地域づくりの強力な資源となりうるはずであるし、もちろん空知地域の農業倉庫なども含めて他の産業遺産にも通じるものと考えている。

### 産業遺産観光と今後の可能性

これまで「炭鉱の記憶」を中心に話を展開してきた。しかし産業遺産は、前述したように、人々の生産の営みを示すもの全てを包括する。言ってみれば、地域形成の根幹であったものだ。これらを「地域資産」として積極的に評価し、自治体の振興計画にも位置づけていく必要がある。ともすると、構造物や建造物の維持保全は、維持管理費などの懸念から敬遠されがちであるが、特徴ある地域ブランドや景観創出、活用計画による活性化には、なくてはならない資産としてみるべきであろう。これらの資産の維持管理補修は、もはや自治体のみ任せの時代ではない。思いが強い地域住民やその活動を支援する市民が、自ら応分の負担をも覚悟する必要がある。もちろん、その活動を支援する外部資金の獲得も方策の一つである。経済的支援ばかりでなく、パンフレットづくりの支援、三笠の炭鉱景観公園などで行われている草刈りなどのボランティア活動、観光に訪れる人に対する語り部としての活動、その関わり方は人それぞれでよい。必要なのは、産業遺産を活用し、地域に誇りを取り戻し、次の世代に引き継ぐ強い意志と思い入れの強さである。

産業遺産に関わる様々な文献や図面資料なども地域資産である。それらの研究や地域学習、生涯学習のために、地域史学、産業資産学、観光資産学、地域資産学、保存再生学、景観学、地域生活学、語り部養成塾などの講座や研究組織のサテライトなどの開設も、地域活性化として十分可能性がある。

観光は一過性のものではない。少数でもリピーターが出現し、地域の魅力を人それぞれが発見し、発信するファンが増えること。さらには、これまでに関わってきた人々や同じような地域活動をする人たちのネットワークも大切な資産としてとらえることも必要である。北海道の発展をこれまで支えてきた産業遺産を、誇れる地域資産として誰もが語れる、そんな時代がすぐそこまで来ていると感じるのは、期待し過ぎであろうか。